

ブラジル・ポルトガル語のアスペクト・テンス体系 —日本語のアスペクト・テンス体系との比較研究—

儀保ルシーラ悦子

1. はじめに

大半のブラジル・ポルトガル語（以下、ポルトガル語）の文法書には、Gênero, Número, Voz, Tempo, Modo, Pessoa という動詞の文法的カテゴリーの記述はあるが、Aspecto というカテゴリーの記述が見当たらない。日常的なあらゆる場面でポルトガル語母語話者が使用する多種多様な形式にアスペクト的意味が含まれているにもかかわらず、Tempo, Modo, perifrases verbais, verbos auxiliares の記述の中で間接的にアスペクト的用法を取り上げることが一般的である。

一方、日本語におけるアスペクト研究は盛んに行なわれている。日本語のアスペクト研究とポルトガル語のアスペクト研究の大きな違いは、その記述方法である。日本語では、完成相を表す形式、継続相を表す形式など、「相」にわけて形式を分類するのが一般的であるのに対し、ポルトガル語では、「相」にわけるとはせずに、例えば、Perífrases de Estar, Perífrases de Ter など、形式で項目を立てて、それぞれの用法を記述していくのが一般的である。

本稿では、日本語における研究手法を用いてポルトガル語のアスペクト・テンス体系について記述する。日本語と対応させながらポルトガル語の体系について記述し、両言語の対応関係を明らかにする。そうすることによって、同時に日本人研究者や学習者の理解を深めるための手段を提供することができるだろう。

2. ポルトガル語のアスペクト・テンス体系

本稿では、工藤(1995)が提示する【基本的なアスペクト・テンス体系】及び【拡大アスペクト・テンス体系】に挙げられているアスペクト的概念（完成性、継続性、パーフェクト性、反復性）及びテンス的概念（現在、未来、過去）に従って、ポルトガル語の形式を紹介していく。そのためには、まず、Travaglia (2006)のアスペクト用語を用いて、Aspecto Pontual, Aspecto Durativo, Aspecto Cursivo, Aspecto Resultativo, Aspecto Perfectivo, Aspecto Iterativo, Aspecto Habitual のように、ポルトガル語の Aspecto を定義する。なお、これらの名称は、筆者自身の考察によるもので、Travaglia とは一致しないところもある。異なる点については、適宜述べていく。次の2.1～2.11でポルトガル語のアスペクト・テンス体系について詳述する。

2.1 【Presente】 Aspecto Durativo + Cursivo / Aspecto Durativo + Resultativo

現在における「継続性」を表す日本語の「シテイル」形式に対して、ポルトガル語では、A) Presente do Indicativo（以下、presente）、B) Estar[presente] + gerúndio、C) Estar[presente] + participio がよく用いられる。以下、(T)で

記した用例は、Travaglia から引用したものであり、その他の用例は、筆者の作例である。

01. O paciente respira bem agora. (T) (患者は今無事に息をしている)
02. Estamos fazendo um bolo para mamãe. (T) (私たちは、ママのためにケーキを作っている)
03. Esta parede está rachando. (この壁はひび割れつつある)
04. As árvores estão tombadas. (木が倒れている)

日本語において「継続性」は「動作の進行＝継続」または変化後の「結果の継続」を表す。主体動作動詞（食べる、歩く）及び主体動作客体変化動詞（作る、切る）では、「シテイル」は「動作の進行＝継続」を表し、主体変化動詞（死ぬ、倒れる）では、変化後の「結果の継続」を表す。¹⁾ 本稿では、前者を Aspecto Durativo+Cursivo と呼び、後者を Aspecto Durativo+Resultativo と呼ぶことにする。Aspecto Durativo+Cursivo には、「継続性」と「進行性」が複合しており、Aspecto Durativo+Resultativo には、「継続性」と「結果性」が複合している。

以上の用例では、01、02、03 が Aspecto Durativo+Cursivo を表している。01 の A)の形式は、意味的に 02、03 の B)の形式と同じであるが、フォーマルな話し言葉、または、書き言葉で用いられやすい。B)の形式は、02 のように「動作の進行＝継続」を表したり、03 のように「変化の進行＝継続」を表したりすることができる。どちらの意味になるかは、動詞の語彙的な意味によるものである。日本語のシテイルは、「変化の進行＝継続」を表すことができず、これは両言語間で大きく異なる点である。

04 は、Aspecto Durativo+Resultativo を表している。ポルトガル語には、日本語における主体変化動詞などのような動詞の分類がないため、Travaglia はこのことについて述べていないが、C)の形式は、変化後の結果の継続を表すため、変化の概念を含まない動詞（comer, andar, cantar など）とは用いられにくいことがいえる。例えば、*O pão está comido, *O homem está andado, *A música está cantada のような用例は不自然である。

2.2 【Presente】 Aspecto Perfectivo

工藤は、パーフェクトとは、<ある限定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること>としている。Travaglia は、“O perfectivo é caracterizado por apresentar uma situação como completa” としており、効力があるかどうかについて問題にしておらず、特に未来と過去の場合に Aspecto Pontual（完成相）との区別が曖昧になっている。混同を防ぐために、本稿では、工藤との対応を考え、「パーフェクト性」を表すものを Aspecto Perfectivo と呼び、「完成性」を表すものを Aspecto Pontual と呼ぶことにする。

現在における「パーフェクト性」を表す日本語の「シタ」、「シテイル」に対して、ポルトガル語では、D) Pretérito perfeito がよく用いられる。

05. Você já estudou para o concurso? (T) (あなたはもう試験のために勉強したか)

06. Uma vez eu falei com o Papa. (T) (私は一度ローマ法王と話している)

07. Ele morreu em janeiro. (T) (彼は、1月に死んでいる)

05～07 の用例は、Aspecto Perfectivo を表している。05 では、D)の形式は日本語のシタに対応しており、「パーフェクト性」を表すには、já (もう) などの副詞が必要になる。副詞がなければ、効力が現存するかどうか問題にならない単なる過去の出来事 (Aspecto Pontual) を表すことになる。また 06 と 07 では、D)の形式は、日本語のシテイルに対応している。シテイルは、厳密に言えば、前者では「経験」、後者では「記録」を表しているが、ポルトガル語でも同じである。

また、スペイン語では、【haber+ participio】(He viajado dos veces a Kyoto)、英語では、【have+participle】(I have traveled to Kyoto twice)のように現在パーフェクトを表すことができるが、ポルトガル語には、「*Hei viajado duas vezes a Kyoto」のように haver が現在形で表れる動詞迂言表現は存在しないことに注意する必要がある。

ポルトガル語には、【ter(presente)+participio】からなる Pretérito Perfeito Composto (複合過去形) の形式があるが、少なくともブラジルでは、この形式はパーフェクト性を表さず、次に述べるように、Aspecto Iterativo を表す形式に移行している。

2.3 【Presente】 Aspecto Iterativo／Aspecto Habitual

現在における「反復性」を表す日本語の「スル」または「シテイル」に対して、ポルトガル語では、E)Ter[presente] + participio、F)Andar[presente]+gerúndio、G)Estar[presente]+gerúndio、H)Presente、I) Viver[presente]+gerúndio がよく用いられる。

08. Ele tem jantado às 17 horas. (彼は、(最近) 17時に夕飯を食べている)

09. Celina anda perguntando por você. (T) (セリーナは (最近よく) あなたのことについて聞く)

10. José está caminhando de manhã. (T) (ジョゼは、朝 散歩している)

11. Ele janta às 17 horas. (T) (彼は、17時に夕飯を食べる)

12. Celina vive perguntando por você. (セリーナは、(いつも) あなたのことについて聞く)

日本語の「スル」と「シテイル」が表す「反復性」は、反復的な出来事及び習慣的な出来事を包括する。一方、ポルトガル語では、「反復」を表す形式と「習慣」を表す形式が異なっており、この二つの概念を区別する必要がある。Travaglia は、それぞれ Iterativo (反復的) と Habitual (習慣的) と呼んでいる。²⁾ 以上の用例では、08～10 が Aspecto Iterativo を表しており、11 と 12 が Aspecto Habitual を表している。

Aspecto Iterativo を表す用例を比べてみよう。いずれもある過去の時点から現在にかけて反復的に行なわれてきた出来事を表している。しかし、E)と F)の形式には、近い過去 (最近) から現在にかけての出来事であるというニュアンスが含まれる。そのため、日本語訳では、「最近」、「最近よく」という副詞でその意味を補っている。更に、E)と F)を比べると、前者は、話し言葉でも書き言葉でも用いられるが、後者は、どちらかといえば、話し言葉で用いられやすい。G)は、本来 Aspecto Cursivo (進行) を表す形式であり、

10 の de manhã のような副詞句がなければ、「反復性」ではなく、「進行性」を表すことになる。

Aspecto Habitual を表す用例を比べると、11 のように H) の形式が用いられる場合、副詞などがなければ「習慣」の意味を表すことにはならないが、12 では、I) の形式自体がその意味を担っていることがわかる。日本語訳では、「いつも」という副詞でその意味を補っている。

2.4 【Futuro】 Aspecto Pontual

Travaglia は、“o aspecto pontual é caracterizado por apresentar a situação como pontual, ou seja, como não tendo duração” としているが、これは、日本語の完成相と同じく、出来事をひとまとまりとしてとらえるものである。未来における「完成性」を表す日本語の「スル」に対して、ポルトガル語では、J)Presente、K)Futuro do presente (以下、Futuro)、L)Ir[presente]+infinitivo、M)Ir[futuro]+infinitivo がよく用いられる。

13. Amanhã compro o livro para você.(T) (明日、あなたのために本を買う)
14. Plantaremos muitas árvores no quintal. (T) (私たちは、庭に木をたくさん植える)
15. Vamos plantar muitas árvores no quintal. (私たちは、庭に木をたくさん植える)
16. Iremos plantar muitas árvores no quintal. (私たちは、庭に木をたくさん植える)

13~16 の用例は、いずれも未来における Aspecto Pontual を表している。しかし、J) の形式には、話し手がある出来事を未来に実現すると発話時の「今」決心したというモーダルな意味が含まれている。Da Silva (1998) も指摘するように、³⁾ この形式は、verbos de ação (運動動詞) で用いられやすく、主語が 1 人称で表れることが多い。13 がその例である。

14~16 を比べると、形式はそれぞれ異なっているが、意味的には同じだといえる。本来、L) は「近接未来」を表す形式だったが、現在ブラジルでは、特に話し言葉では、K) と M) はほとんど用いられることなく、「単純未来」も「近接未来」も L) によって表される。⁴⁾

2.5 【Futuro】 Aspecto Durativo + Cursivo / Aspecto Durativo + Resultativo

未来における「継続性」を表す日本語の「シテイル」形式に対して、ポルトガル語では、N)Estar[futuro]+gerúndio、O)Ir[presente]+Estar[infinitivo]+gerúndio、P)Estar[futuro]+particípio、Q)Ir[presente]+Estar[infinitivo]+ particípio がよく用いられる。

17. Estará chovendo quando chegarmos ao Rio.(T) (私たちがリオに着く頃には雨が降っている)
18. Vai estar chovendo quando chegarmos ao Rio. (私たちがリオに着く頃には雨が降っている)
19. No domingo à noite eu estarei voltando da praia. (日曜日の夜には私は海から帰りつつある)
20. No domingo à noite eu vou estar voltando da praia. (日曜日の夜には私は海から帰りつつある)
21. Depois da cirurgia o seu filho estará curado. (手術後には、息子さんは治っている)
22. Depois da cirurgia o seu filho vai estar curado. (手術後には、息子さんは治っている)

23. Daqui a vinte minutos a roupa estará lavada. (20分後には、洗濯物は洗われている)

24. Daqui a vinte minutos a roupa vai estar lavada. (20分後には、洗濯物は洗われている)

17~20 は、Aspecto Durativo+Cursivo を表しており、21~24 は、Aspecto Durativo+Resultativo を表している。

まず、Aspecto Durativo+Cursivo の用例を比べると、17 と 18 が<動作の進行=継続>を表しているのに対し、19 と 20 は<変化の進行=継続>を表している。話し言葉では、18 と 20 の O)の形式が 17 と 19 の N)の形式より多く用いられる。また、ここで注目したいのは、() 内の日本語訳にもあるように、シテイルは<動作の進行=継続>しか表せないが (17,18)、ポルトガル語の N)と O)は、共に<動作の進行=継続> (17,18) も<変化の進行=継続> (19,20) も表すことができる点である。

Aspecto Durativo+Resultativo の用例を見ると、21~24 は、変化後の<結果の継続>を表している。現在における Aspecto Durativo+Resultativo と同様に、これらの形式は、変化後の結果の継続を表すため、変化の概念を含まない動詞とは用いられにくく、*O pão estará comido, *O homem estará andado, *A música estará cantada のような用例は不自然である。また、変化を伴う場合でも、主体の変化がある主体変化動詞 (21、22) では、Aspecto Durativo+Resultativo が前面化するが、主体が働きかけた客体の変化がある主体動作客体変化動詞の場合 (23、24) では、Aspecto Durativo+Resultativo が次に述べる Aspecto Perfectivo (27,28,32) と重なる面を持つ。

2.6 【Futuro】 Aspecto Perfectivo

未来における「パーフェクト性」を表す日本語の「シテイル」に対して、ポルトガル語では、R) Ter[futuro] +participio、S)Ir[presente] +Ter[infinitivo] + participio、T)Haver[futuro] + participio がよく用いられる。

25. Quando eles voltarem, já terei comido o lanche. (彼らが帰ってくる頃には、私は既にサンドイッチを食べている)

26. Quando eles voltarem, já vou ter comido o lanche. (彼らが帰ってくる頃には、私は既にサンドイッチを食べている)

27. Quando eles voltarem, já terei lavado a roupa. (彼らが帰ってくる頃には、私は既に洗濯物を洗っている)

28. Quando eles voltarem, já vou ter lavado a roupa. (彼らが帰ってくる頃には、私は既に洗濯物を洗っている)

29. Até o mês que vem, os ipês terão florescido. (来月までには、イペは咲いている)

30. Até o mês que vem, os ipês vão ter florescido. (来月までには、イペは咲いている)

31. Se você não impedir, em algumas horas Pedro haverá comprado o carro. (あなたが止めなかったら、数時間後にはベドロは車を買っている)

32. Quando chegarmos, Marina haverá picado a carne. (私たちが着く頃には、マリーナは(既に)肉を刻んでいる)

33. Seu primo haverá chegado, quando voltarmos à fazenda. (T) (私たちが農場に帰る頃には、あなたのいとこは着いている)

25、27、29 では、R)の形式が用いられており、いずれも未来のある基準時点においてそれよりも前に実

現した出来事 (comer, lavar, florescer) の効力が残っていることを表している。26、28、30 に表れる S) の形式は、R) の形式と同じ意味を表し、Ir+infinitivo からなる動詞迂言表現のように、話し言葉で用いられやすい形式である。前述した Aspecto Durativo+Resultativo の用例と比べると、27~30 は、21~24 と同様に変化後の結果の継続を表しているが、ここでは、状態が継続していることよりも、効力が残っていることが重視されている。そのため、P) と Q) の形式には、変化の概念を含まない動詞とは用いられにくいという制限があったが、R) と S) の形式は、どのタイプの動詞でも用いられる。

また、31~33 に表れる T) の形式は、R) と S) と同じ意味を表すが、この形式は、話し言葉でほとんど用いられない。書き言葉の形式であるため、Ir+infinitivo とは表れにくく、(?) Pedro vai haver comprado o carro、(?) Marina vai haver picado a carne、(?) Seu primo vai haver chegado というとき少し不自然に聞こえる。

2.7 【Futuro】 Aspecto Iterativo / Aspecto Habitual

未来における「反復性」を表す日本語の「スル」に対して、ポルトガル語では、U) Futuro、V) Ir[presente]+infinitivo、W) Ir[futuro]+infinitivo がよく用いられる。未来においては、Aspecto Iterativo と Aspecto Habitual は、同じ形式によって表される。

34. Eles atravessarão o rio várias vezes. (T) (彼らは、何度も川を渡る)
35. Eles vão atravessar o rio várias vezes. (彼らは、何度も川を渡る)
36. Eles irão atravessar o rio várias vezes. (彼らは、何度も川を渡る)
37. Aos domingos passaremos pelos campos. (T) (日曜日は、野原を散歩する)
38. Aos domingos vamos passear pelos campos. (日曜日は、野原を散歩する)
39. Aos domingos iremos passear pelos campos. (日曜日は、野原を散歩する)

34~36 の用例は、未来における Aspecto Iterativo を表している。意味的には、U)、V)、W) の形式は同じであるが、V) が話し言葉で最も一般的であり、U) と W) は、フォーマルな話し言葉や書き言葉で用いられやすい。37~39 の用例は、未来における Aspecto Habitual を表しており、ここでも、U)、V)、W) の形式は意味的には違いを持たず、V) が話し言葉で最も一般的であり、U) と W) は、フォーマルな話し言葉や書き言葉で用いられやすい。

なお、現在の Aspecto Iterativo で説明した「Ter+particípio」、「Andar+gerúndio」、「Estar+ gerúndio」は、未来の形をとっても Aspecto Iterativo を表さない。「Ter+particípio」の未来形は、⁵⁾ 40 のように Aspecto Perfectivo を表し、「Andar+gerúndio」の未来形はそもそも用いられず、⁶⁾ Travaglia は 41 を非文法的なものとして挙げている。また、「Estar+ gerúndio」の未来形は、42 のように未来における Aspecto Durativo+Cursivo を表す場合に用いられる。

40. Ele terá jantado às 17 horas. (17 時には、彼は既に夕飯を食べている)
41. *Andará chovendo no Rio, quando chegarmos lá. (T)

42. José estará caminhando amanhã de manhã. (明日の朝は、ジョゼは、散歩している)

また、現在の Aspecto Habitual を表す「Viver+gerúndio」は、未来の形をとつても Aspecto Habitual を表さず、Viver という助動詞は、本動詞（Viver＝暮らす）として働き、gerúndio は副詞的な役割を果たす。例えば、Travaglia は、次の例を挙げている。

43. Você viverá pedindo esmolas. (T) (あなたは、施しを乞いながら暮らす)

44. Viveremos esperando que você volte. (T) (私たちは、あなたが帰ってくるのを待ちながら暮らす)

2.8 【Passado】 Aspecto Pontual

過去における「完成性」を表す日本語の「シタ」に対して、ポルトガル語では、X) Pretérito perfeito がよく用いられる。

45. Ele correu cinco horas. (T) (彼は五時間走った)

46. José leu o livro. (T) (ジョゼは本を読んだ)

これらの用例は、過去において実現した出来事を表している。Aspecto Perfectivo 【Presente】を表す 05~07 とは異なり、45 と 46 では、過去の出来事は現在と関係づけられていない。つまり、過去に実現した出来事が現在において効力を持っているかどうか問題にならない。このような過去は、Vargas(2001:19)にもあるように、aoristo とも呼ばれる。

2.9 【Passado】 Aspecto Durativo + Cursivo / Aspecto Durativo + Resultativo

過去における「継続性」を表す日本語の「シテイタ」形式に対して、ポルトガル語では、Y) Pretérito imperfeito、Z) Estar[pretérito imperfeito] + gerúndio、AA) Estar[pretérito imperfeito] + participio がよく用いられる。

47. Ricardo estudava há três dias. (T) (ヒカルドは、三日間勉強していた)

48. Quando o filho chegou, o pai saía para trabalhar. (息子が着いたとき、父親は仕事に出かけつつあった)

49. Ele estava nadando desde as 6 horas da manhã. (T) (彼は、朝の6時から泳いでいた)

50. Quando você me ligou eu estava voltando da praia. (あなたが私に電話したとき、私は海から帰りつつあった)

51. A árvore estava tombada. (木が倒れていた)

52. O bolo estava fatiado. (ケーキが切られていた)

過去においても、日本語の「継続性」に対応して、ポルトガル語では、Aspecto Durativo + Cursivo と Aspecto Durativo + Resultativo が区別される。

Aspecto Durativo + Cursivo は、47~50 のように Y) または Z) の形式によって表される。いずれも、過去における<動作の進行=継続>または<変化の進行=継続>を表すことができる。47 と 49 は、<動作の進行=継続>を表し、48 と 50 は、<変化の進行=継続>を表している。話し言葉では、Z) が一般的であり、Y) は、書き言葉で用いられることが多い。

Aspecto Durativo+Resultativo は、AA)の形式によって表される。現在と未来と同様に、過去においても、Aspecto Durativo+Resultativo は、51 と 52 のように、変化後の<結果の継続>を表すため、変化の概念を含まない動詞とは用いられにくく、*O pão estava comido, *O homem estava andado, *A música estava cantada のような用例は不自然である。また、変化を伴う場合でも、主体の変化がある主体変化動詞 (51) では、Aspecto Durativo+Resultativo が前面化するが、主体が働きかけた客体の変化がある主体動作客体変化動詞の場合 (52) では、Aspecto Durativo+Resultativo が Aspecto Perfectivo と重なる面を持つ。

2.10 【Passado】 Aspecto Perfectivo

過去における「パーフェクト性」を表す日本語の「シテイタ」に対して、ポルトガル語では、BB)Pretérito mais-que-perfeito、CC)Ter[pretérito imperfeito]+participio、DD)Haver[pretérito imperfeito]+ participio がよく用いられる。

53. Quando a mãe chegou, Rafael comera todo o doce. (お母さんが着いた時、ハファエルはお菓子を全部食べていた)
54. Quando chegamos, Valdir já tinha saído. (私たちが着いたとき、ヴァウジールは、既に出かけていた)
55. Quando cheguei, Marina havia picado a carne. (T) (私が着いたとき、マリーナは (既に) 肉を細かく切っていた)

過去における Aspecto Perfectivo は、過去に置かれた基準時点においてそれよりも前に実現した出来事の効力が残っていたことを表す。意味的には、BB)、CC)、DD)の形式は、同じであるが、BB)の形式は、話し言葉でほとんど用いられず、最も一般的なものは CC)の形式である。DD)の形式は、話し言葉でも用いられるが CC)の形式ほど使用頻度は高くない。

2.11 【Passado】 Aspecto Iterativo / Aspecto Habitual

過去における「反復性」を表す日本語の「シタ」、「シテイタ」に対して、ポルトガル語では EE) Pretérito perfeito、FF)Andar[pretérito perfeito]+gerúndio、GG)Pretérito imperfeito、HH)Viver[pretérito imperfeito]+gerúndio がよく用いられる。

56. Ela me acenu várias vezes.(T) (彼女は、何度も私に手を振った)
57. A sua tia andou espalhando fofocas. (あなたのおばさんは、(何度も) 噂話を広めた)
58. Todos os domingos, mamãe fazia biscoitos. (毎週日曜日には、母はビスケットを作っていた)
59. A minha avó vivia tomando remédio para enxaqueca. (私の祖母は、(いつも) 頭痛薬を飲んでいた)

過去においても、日本語の「反復性」に対して、ポルトガル語では、Aspecto Iterativo と Aspecto Habitual にわけて形式が使い分けられる。

まず、Aspecto Iterativo を表すには、56、57 のように、EE)または FF)の形式が用いられる。EE)は副詞句と共に「反復性」を表し、副詞がなければ Aspecto Pontual を表すことになる。一方、FF)は副詞などがなくても「反復性」を表すことができる。わかりやすいように、57 の日本語訳では、「何度も」という副詞でそ

の意味を補っている。

また、FF)の形式 Andar が、Pretérito Imperfeito の形をとる場合がある。この場合は、例えば、Há um tempo atrás, eu andava esquecendo muito as coisas. (以前、私はよく物忘れをしていた) のように、出来事が起こった時点は、離れた過去にあり、更にその反復期間が長かった場合に用いられやすい。これは「習慣」に近いものだといえる。

Aspecto Habitual を表すには、58 と 59 のように、GG)または HH)の形式が用いられる。GG)は過去の Aspecto Durativo+ Cursivo を表す形式と同一のものであり、58 の「todos os domingos」(毎週日曜日)のような副詞がなければ「習慣」の意味を表すことにはならない。一方、HH) は副詞がなくても習慣の意味を表すことができる。59 の日本語訳では、「いつも」という副詞で「習慣」の意味を補っている。

3. まとめに代えて

工藤 (2008:37) が述べるように、「日本語の標準語のアスペクトは、完成相と進行相／結果相の二項対立型になっている。しかし、これは世界的に見て珍しいアスペクトの体系である。世界的によく見るのは、完成相とは別に進行は進行を表す形、結果は結果を表す形の両方を用意している三項対立型である」。ポルトガル語のアスペクトも進行相と結果相を区別する三項対立型になっている。言うまでもなく、三項対立型であるポルトガル語のアスペクト体系は、二項対立型である日本語のアスペクト体系より形式の数が多い。それは、対立型が異なるだけでなく、日本語では、存在動詞の「イル」が文法化し、本動詞の第二中止形(シテ)と組み合わせさせてアスペクト形式を成しているのに対し、ポルトガル語では、estar, ter, haver, ir, andar, viver という複数の助動詞が「イル」と同様な役割を果たし、更に、本動詞が gerúndio と participio の二つの形をとることができるからである。⁷⁾

本研究は、管見の及ぶ限り、日本語のアスペクト・テンス体系とポルトガル語のアスペクト・テンス体系を比較する初めてのものである。ここでは、既に諸形式のモダリティーに関わる問題、語彙的アスペクトの問題など、様々な研究課題が残されるが、本稿の内容はアスペクト・テンス研究における日本語とポルトガル語の比較研究を行なうための一つの土台となるだろう。また、本研究が日本語母語話者のポルトガル語教育に役立つものとなれば幸いである。

註

¹⁾ 工藤は、日本語の動詞を「運動動詞」と「状態動詞」に分類し、「運動動詞」を更に「主体動作動詞」、「主体動作客體変化動詞」、「主体変化動詞」の3つのタイプに分類している。本稿では、工藤に倣ってポルトガル語の動詞も同じように分類している。

²⁾ Travaglia は、O iterativo se caracteriza por apresentar uma situação como tendo duração descontínua limitada(p.81)、そして、o habitual é o aspecto que apresenta a situação como tendo duração descontínua ilimitada(p.82)と区別している。

³⁾ Da Silva (1998) は、未来の出来事を表す Presente を Presente Futuro と呼び、この形式が表す a relevância do presente

psicológico (心理的現在の重要性)、a certeza (確信)、a determinação (決心) というモーダルな意味について論じている。

- 4) Almeida (2009:1) は、このことについて“O Português Brasileiro vem apresentando consideráveis mudanças no que concerne ao uso do tempo futuro. É claramente perceptível, pelo menos na língua oral, que a forma verbal composta, formada por IR+Infinitivo, tem substituído a forma de futuro simples, passando a expressar, em seu lugar, a futuridade. O futuro sintético tem aparecido quase que, exclusivamente, em textos escritos.”と述べている。
- 5) 疑問文の中では、「Ter+particípio」の未来形が「Terá ele chegado às 17 horas? (彼は 17 時に着いたのだろうか)」のように過去の出来事の推量を表すことがある。この場合は、主語が Ter と particípio の間に表れるのが一般的である。これは、アスペクトではなく、モダリティーの用法である。
- 6) 「Andar+gerúndio」の未来形は平叙文では用いられないが、疑問文の中では「Andará chovendo em São Paulo? (サンパウロは雨が降っているのだろうか)」のように、現在の仮定を表す形式として働く。これは、アスペクトではなく、モダリティーの用法である。
- 7) 本稿では、ir+gerúndio, vir+gerúndio, ficar+gerúndio, começar a+infinitivo, acabar de+infinitivo などの形式について述べていないが、それは、これらの形式に対応する日本語の「していく」、「してくる」、「しつづける」、「し始める」、「し終わる」が Aspecto ではなく、Aktionsart の形式であるからである。工藤もアスペクチュアリティーの表現手段は、大きく文法的手段と語彙的手段に分かれると指摘し、文法的手段としてのアスペクトと区別して、Aktionsart は、動詞的な語彙的手段をさすものであると述べている。紙幅の都合上、本稿では Aspecto の形式のみ取り上げている。

参考文献

- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 工藤真由美・八亀裕美 (2008) 『複数の日本語 方言からはじめる言語学』講談社・選書・メチエ
- 須田義治 (2003) 『現代日本語のアスペクト論』海山文化研究所
- 彌永史郎 (2011) 『ポルトガル語四週間』大学書林発行

- ALMEIDA, C.M.B.de. Futuro Simples X Ir Infinitivo- uma análise diacrônica do uso de formas verbais sintéticas e perifrásticas no Português Brasileiro. Rio de Janeiro: Anais do XIII CNFL, 2009. pp.1892-1906.
- CASTILHO, A.T. de. *Introdução ao Estudo do Aspecto Verbal na Língua Portuguesa*. Marília: Alfa, 1968.
- CASTILHO, A.T.de.; ELIAS, V.M. *Pequena Gramática do Português Brasileiro*. São Paulo: Contexto, 2012.
- CORÔA, M.L.M.S. *O Tempo nos Verbos do Português*. São Paulo: Parábola, 2005.
- COSTA, S. B. B. *O Aspecto em Português*. São Paulo: Contexto, 2002.
- DA SILVA, A. O Presente Futuro uma questão semântico-discursiva. São Paulo: Alfa, v.42, p.151-168, 1998.
- LIMA, R. *Gramática Normativa da Língua Portuguesa*. 48.ed. Rio de Janeiro: José Olympio, 2010.
- TRAVAGLIA, L.C. *O Aspecto Verbal no Português a categoria e sua expressão*. 4.ed. Uberlândia: Edufu, 2006.
- VARGAS, M.V. *Verbo e práticas discursivas*. São Paulo: Contexto, 2011.